

2021年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2022年5月27日

2. 提出者氏名：陳予茜

3. 申請した研究テーマ：中国における一人っ子女性の親子関係に関する研究

4. 研究活動報告

本研究は2019年、2020年、2021年、3年をかけて調査を実施したが、2020年と2021年の調査はコロナ禍で現地に渡航することが困難であったため、メッセージングアプリ Wechat のビデオ通話を利用し、オンラインで実施した。

調査対象者はスノーボール・サンプリングによって選定し、調査時に中国の沿海部にある浙江省紹興市に在住する40名の一人っ子女性から協力を得た。2021年の調査は、主に一人っ子女性の子育ての実態、および子育ての過程のなかで母親と形成した関係性を中心に聞き取りをした。

調査データの分析を通して現時点では以下のことが明らかになった。

まず40名の調査対象は全員母親から育児の援助を得ており、母親が対象者の育児に関わっていることがわかった。しかも母親は先行研究が指摘したように娘の育児のサポーター、つまり周縁的な存在だけではなく、母親は自分が持つ経済資源と物質資源、およびこれまでに娘と結んだ親密性によって、娘（夫婦）の育児に意見を言いだしたり、不満を持ったり、いわゆる発言権を持つようになった。こうした母娘の関係性により、本研究は育児における一人っ子女性と母親の関係性を四つのタイプに分類した。それぞれは、「娘が主導で、母親が協力する」「母親が主導で、娘が協力する」「母娘はそれぞれ自分のやり方です」「母娘は話し合いながら、意見を交換する」である。

タイプ1の「娘が主導で、母親が協力する」に分類された対象者は、計11名であり、彼女たちは普段 SNS や書籍などの媒体を通じて、専門家と思われる人たちが発信する育児情報を入手している。他方で、対象者の母親は対象者をちゃんと育てたことを根拠として、自分の経験による育児は間違っていないと主張しており、母娘の間に競争関係がみられた。このような母娘の関係性に対して、タイプ1の対象者は自分が受けた教育と、自分は子どもの母親であるという二つの側面を強調し、この二つの側面を強調することを通して、自分が育児に対して発言権を持っていることの正当性を示した。

タイプ2の「母親が主導で、娘が協力する」に分類された対象者は、4名である。このタイプの対象者は母親に依存する、あるいは母親の苦労を理解する傾向にあることが確認できた。またタイプ1の対象者とは違い、タイプ2の対象者は本人の母親である属性を自分の

優位性を示すものとして使うのではなく、母親の犠牲や苦勞を理解させてくれるものとして位置づけている。彼女たちは母親に強い信頼感を抱き、母親との関係性が親密である。

タイプ3の「母娘はそれぞれ自分のやり方です」に分類された10名の対象者は、資源とサポートを提供してくれる母親は発言権を持つべきであると思いつつ、自分は母親の子育て方に従うことはしない。彼女たちは自分のやり方を放棄せず、貫いている。そうすることで、母親の影響力を弱めさせている。

タイプ4の「母娘は話し合いながら、意見を交換する」に分類された対象者は計7名で、彼女たちは四つのタイプのなかで母親との衝突が最も少ないグループである。このタイプの母親たちは対象者と同様に育児情報の収集が得意で、科学育児に熱心である。つまり母親は対象者に自分が時代遅れになっていないことをアピールすることによって、対象者に安心感を与えようとしている。

以上のような分析結果によって、育児における母娘の役割と地位は必ずしも母親が協力的で、周縁的であり、娘が主導的で、中心的であるとは限らないことも検証された。母娘の両方は子ども（孫）がよい生活とよい教育を受けられるようと意見をぶついたり、調整したりしていることがわかった。このような研究成果を踏まえて、今後は一人っ子女性と母親がそれぞれ「科学育児」と「経験育児」に対する態度と捉え方を考察、母娘の関係性をより全面的に考察したい。